

平成 29 年 5 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770073

研究課題名(和文)ゴードン・クレイグの日本人形劇受容に関する草稿研究

研究課題名(英文)The Study of Gordon Craig's Manuscripts about Acceptance of Japanese Puppet Theatre

研究代表者

菊地 浩平(Kikuchi, Kohei)

早稲田大学・文学大学院・助教

研究者番号：30580435

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は20世紀に活躍した英国の演出家ゴードン・クレイグが日本の人形劇をいかに受容し、どのような影響を受けたかについて、彼の手書きの草稿等を対象に検討するものである。

そのために報告者はまず、フランス国立図書館に所蔵されている彼に関する資料を調査収集し、その内容を分析した。その後、その成果を踏まえ彼の演劇論や舞台作品とそれら資料の関連を明らかにし、学会等で報告を実施した。

本研究によって得られた成果をもとに、今後はクレイグが日本の人形劇に与えた影響とその波及について検討を行っていく予定である。

研究成果の概要(英文)： This research is to clarify the influence of twentieth-century English stage director Gordon Craig on Japanese puppet theatre, by studying his manuscripts.

To do this, I first examined, collected, and analysed documents relating to him that were in the BNF. Based on my findings, I clarified his theory of theatre and stage work and the relationship between the two in these documents, and presented a paper on this at academic conferences. From the results obtained in this research, my plan is to investigate the influence of Craig on puppet theatre in Japan and its spread to other fields.

研究分野：人形劇

キーワード：人形劇 ゴードン・クレイグ サミュエル・フット

1. 研究開始当初の背景

報告者が研究対象としたエドワード・ゴードン・クレイグは、「演出家」という概念やその役割を初めて定義した 20 世紀を代表する演劇人のひとりである。クレイグについて同時代に活躍した劇作家のバーナード・ショーが「なにも演出しないことによりヨーロッパで最も有名になった」と述べる通り、演出家という概念の創始者でありながら 1912 年にモスクワ芸術座で上演した『ハムレット』が唯一の演出作品であるために、舞台創作者としての実績はほぼ皆無に等しい。

その一方で、クレイグは数多くの演劇論を執筆しており、特に 1907 年発表の「俳優と超人形」において「全ての人間俳優を排除してその代わりに超人形を用意すべきだ」と主張したことで、その過激な論調や抽象的な内容に批判が集まっただけでなく、パウハウスや未来派といったモダニズム芸術運動、ピーター・ブルックやタデウシュ・カントールに代表されるポストドラマ演劇にも強い影響を与えたことでよく知られている。

そのためクレイグに関する先行研究は、オルガ・タキシードのように、19 世紀末から隆盛を極めつつあったリアリズム演劇に演劇論でいかに異議を唱えていたか解釈を試みるものや、ドニ・パブレのように「俳優と超人形」と『ハムレット』を結びつけ、1912 年以降、舞台演出にかかわらなくなるクレイグの理想がいかに実際の舞台上で挫折したかを検証するものなど、公刊された資料をもとに演劇論の分析を試みるものがほとんどであった。

しかし申請者は大学院博士後期課程在学中及び日本学術振興会特別研究員 (PD) としての研究活動において、海外機関に出向きクレイグの未発表草稿、未発表人形劇作品を大量に収集し、所蔵機関と連携をはかりながら資料の詳細を詳らかにしてきた。そうした作業を通じ、存在自体が定かではなかった未発表人形劇を 50 作以上収集した。またそれらの資料を人形劇作品分析に活用し、国内外で成果発信を続けてきた。

こうした研究活動のなかで、クレイグが日本の伝統的な人形劇である人形浄瑠璃文楽などに強い関心を抱いていたことがわかってきた。これまでもオルガ・タキシードやサン・キョン・リーが、日本演劇に示してきたクレイグの「好意」については言及していたものの、具体的にその影響関係が検討されたことはあまりない。もしこうした未発表資料の検証作業を通じ、クレイグの演劇論等に日本人形劇から何らかの影響があったことが明らかになれば、かなりのインパクトをもった研究成果となる。そこでフランス国立図書館及び大英図書館等において調査を進めて

みたところ、クレイグが日本人形劇に関する文献を複数所有しており、更にそれらに関する未発表資料も所蔵されていることが判明した。

この事前調査の結果を踏まえ、申請者が各所蔵機関に出向き日本人形劇に関わる資料の収集作業を行ない、演劇論や演出作品の分析に活用するという研究計画を着想した。申請者は研究開始当時、日本学術振興会特別研究員 (PD) として未発表人形劇を対象とした研究活動を行っていたが、その発展的な派生研究として本計画を遂行することで、より広範な未発表資料を対象とした作品分析が可能になることが見込まれた。そこで同時期に並行して研究を進めていく必要があると考え、申請に至った。

2. 研究の目的

上述した研究開始当初の背景を踏まえ、本研究はゴードン・クレイグが日本の伝統的な人形劇から受けた影響を明らかにするため、未発表資料の収集と作品分析を主な目的とした。日本人形劇に関しクレイグが執筆した資料を収集し、その内容を詳らかにしながら演劇論や演出作品に日本人形劇がどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることで、申請者自身の研究を更に推進するための基盤の整備と、国際的なインパクトをもつ成果の発信を目指した。

そのためまずは「俳優と超人形」の構想をまとめたノートに記された日本の文楽への強い関心が、演劇論にどのような影響を及ぼしているか検討した。その上でクレイグの演出作品などとの関連についても、新たに収集する資料調査の成果を踏まえ検討を行なった。クレイグは演出作品において舞台装置や衣装、俳優の動作をしばしば「日本風に」と指示していたことはよく知られているが、その指示が日本人形劇と何らかの関係があるのかどうか、そして、クレイグが創始し現代演劇においてはもはや自明のものとなった「演出 / 演出家」という概念と日本人形劇との結びつきについて検証することを目指した。

3. 研究の方法

本研究で実施した方法を以下、年度ごとに示す。

26 年度

26 年度は、まずこれまでの研究活動ですでに収集した資料の中から、本研究にかかわる資料選定作業を実施した。クレイグの息子が書いた伝記によれば、「活動初期から最晩年に至るまで日本演劇に対しての強い関心」があり、様々なテキストを残していることは間違いないが、その全貌については不明のままであった。事前に予想していた以上に入念か

つ広範な資料を対象とした検討作業が必要となった。

《27年度》

27年度は、26年度に得た成果をもとにしつつ、フランス国立図書館における資料調査を行なった。事前調査により存在が明らかになっていた『イギリスの近松—シェイクスピアについて』と題された未発表資料に加え、新たに現地で発見したものについても随時複写を行ない、収集を進めた。なお、これらは資料の特性上、紙片が束ねられているだけのものや他の資料に混ざって保管されていることも少なくないため、発見が困難なものも少なくないが可能な限り網羅的に収集することを目指した。また、前述のとおり、フランス国立図書館にはクレイグが生前所有していた書籍や雑誌も所蔵されているため、日本人形劇にかかわるどのような文献を読んでいたか、そこにどのような書き込みが残されているかについてもあわせて調査を行なった。

調査から帰国後はこの調査成果をもとに、申請者が作成しているクレイグの未発表資料についてまとめたデータベースへの流し込み作業を行なった。本研究において収集した資料の中には手書きのものが多く含まれていたため、それらを整理・解読してデジタル化し作品についての情報を記したデータベースを作成した。データベースには、資料の全文や図版に加え、執筆時期や保存状態、所蔵箇所といった情報も収録した。これは今後申請者が作品分析をしていくにあたっての下準備となるばかりか、未発表でこれまで日の目を見なかった資料を対象に行なうため、この取り組み自体がクレイグ研究に寄与するものであると共に、本研究の中心を占める最も重要な作業のひとつであった。

《28年度》

28年度は26、27年度に得た成果を踏まえ、クレイグの演劇論、演出作品と日本人形劇のかかわりについて作品分析を行なった。特に「俳優と超人形」から『ハムレット』演出へと連なるクレイグの主要演劇活動に日本人形劇から受けた影響がどのように反映されたかを明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

本研究はゴードン・クレイグの「俳優と超人形」をはじめとする演劇論やその他演劇活動に、日本人形劇がいかなる影響を与えていたかについて資料調査を踏まえて明らかにするものであった。

当初の計画では期間内の各年度に海外機関に向く予定であったが、過年度における調査により収集済みであった資料を子細に検討したところ、本研究と密接に関わる記述

を複数発見した。そのことを受け、27年度のみ海外機関に向き、それ以外の時間は収集済み資料の分析と、それを活用した作品分析に充てた。

以下、各年度の研究成果を示す。

《26年度》

26年度はとりわけ、20世紀当時から現代まで多くの議論を呼び続けているクレイグの代表的な演劇論「俳優と超人形」と日本人形劇／人形文化の関連についての資料検討を行なった。この演劇論の中でクレイグは、人間俳優に代わって登場すべき理想の演技者として超人形を提起しているが、その定義は「曖昧」で「非現実的」な概念と評されることが少なくなかった。しかし、報告者が検証を行なった未発表資料の中で、クレイグが日本人形劇の特に人形浄瑠璃文楽に着目し、その人形遣いと人形の表象を自身の創始した超人形と関連付けていることが分かった。この事実が極めて興味深いのは、クレイグがそもそも舞台上に登場する人間俳優の身体が理性や感情に支配されることを嫌い、それを避けるために超人形という概念を創始したという背景による。すなわち、これまで学術研究の分野で高く評価されてきたとはいえない超人形という概念を考察するにあたり、彼の日本人形劇受容のありようを踏まえることが重要な手掛かりとなる可能性が出てきたのである。

以上のことから26年度の研究活動によって、超人形という概念の根源には日本人形劇の特異な上演形態からの影響を見出しうる可能性が浮かび上がった。そのことを受け、本テーマについて更なる検証を行なう必要が生じることとなった。

《27年度》

27年度はフランス国立図書館に向き、クレイグに関連する資料の調査を行なった。帰国後は本年度収集した資料だけでなく、前年度までに収集済みの資料についての検証作業も実施した。

26年度は日本人形劇と「俳優と超人形」の関連について重点的に検討を行なったが、27年度はクレイグの他の演劇論や人形劇作品にもその対象を広げた。そうしたことによって、クレイグの演劇活動において日本人形劇がどの程度重要であったのかを改めて検討することが出来た。

こうした作業から明らかになったのは主に2点である。1点目は、日本人形劇はクレイグの演劇活動において重要な靈感源のひとつであったということ、そしてもう1点目は、クレイグが日本人形劇に対しそれほど正確な知識は持ち合わせておらず、そのことを

踏まえると演劇論や作品への彼の「引用」を分析するには、それが「誤解」を大いに含むものであったことを念頭に置く必要があるということである。

もちろん前年度までに明らかになったような、クレイグの超人形のイメージに日本人形劇における操り手と人形の関係が見出せる点などは極めて興味深い事実である。しかし一方で、日本人形劇がクレイグのもとにどのような「ねじれ」をはらんで伝わっていたかについては、本研究で収集した資料をもう少し慎重に検証する作業を経る必要があることが明らかになった。

《28年度》

上述の通り、26、27年度は主に資料収集とその分析を実施し、クレイグが日本の人形浄瑠璃をはじめとする人形劇にいかに強い関心を示し、それが彼の演劇論をはじめとする演劇活動にどのような影響を与えていたかを検討してきた。

28年度は、前年度までの調査等で収集した資料とその情報をもとに成果発信につとめた。当初はクレイグがいかに日本人形劇を受容し得たかという観点に絞った検証を行なう予定であったが、20世紀初頭から第二次大戦前後の状況を鑑みると、クレイグが日本人形劇、人形文化に与えた影響もまた小さくないということが分かってきた。つまりそこには相互的な影響関係を見出すことが出来、その双方を検証しなければ十全な成果は得られないことが想定される。また、その際受容のあり方も、クレイグが日本の人形劇に対しそうであったように少なからぬ「ねじれ」をはらんでいることが見込まれる。

そうした点を考慮し、28年度はクレイグが日本人形劇に与えた影響やその波及のあり方まで視野に入れて検討を行なった上で、成果発信を行なった。当初予定していたよりもより広範な対象が研究されることとなったが、そのことによってゴードン・クレイグという人物の今日的な重要性やその演劇論の強度が再確認された。

以上のことから報告者は今後、クレイグを起点とした大正から昭和にかけての日本人形劇の活動の実態とその波及について新たに検討を行なう予定である。そのことによって、これまで十分に学術的検討がなされてきていないこの時期の日本人形劇を研究するための新たな切り口を提示することが可能になるはずである。

なおこうした研究が持つ学術的な特色についても述べておきたい。申請者が過去に取り組んできた研究と同様に、これまで言及されたことのないものや何について書かれた

ものなのか検証されていない未整理資料を主に取り扱ったため、その内容を詳らかにしながら研究を進めること自体に、学術的な価値があった。また現地機関と連携をはかりながら更なる収集作業も行なうものであるため、新たな関連資料発掘の機会としても位置付けることが出来る。

更に本研究は、資料調査することだけにとどまらず、クレイグの演劇論、演出作品等の作品分析への成果の活用を即時に行なった点も特色である。これまでクレイグと日本人形劇との関連について具体的に検証されたことはあまりなかったため、先行研究が見落としてきたクレイグ演劇の新たな側面を研究期間内に可能な限り明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

菊地浩平「日本人形表象文化と、着ぐるみ/ギニョールとしてのゴジラ」『表象・メディア研究』第7号、31-52、2017年3月、査読有

菊地浩平「リカちゃんなぜ太らないのか」『日本人形玩具学』第27号、39-50、2017年3月、査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

菊地浩平「ゴードン・クレイグの超人形とその起源—サミュエル・フットからの影響を中心に」、早稲田 表象・メディア論学会、第11回研究集会、2015年06月06日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都・新宿区)

菊地浩平「でくのぼうとしての初音ミク」国際日本文化研究センター「日本の舞台芸術における身体-死と生、人形と人工体」第4回研究会、2016年03月19日、国際日本文化研究センター(京都府・京都市)

菊地浩平「初音ミクは操作自在な人形か」日本人形玩具学会、2016年10月1日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都・新宿区)

〔その他〕
ホームページ等

菊地浩平(執筆原稿) WASEDA ONLINE「最強?人形ホラーとしての『アンパンマン』」
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/culture/170227.html>

菊地浩平(取材記事) デイリー・ポータルZ

「大人たちよ、人形は捨てなくてもいい(と
専門家が言ってた)」

http://portal.nifty.com/kiji/170403199217_1.htm

6 . 研究組織

(1)研究代表者

菊地 浩平 (KIKUCHI, Kohei)

早稲田大学・文学学院・助教

研究者番号：30580435